

## ねがいのいえニュース 第49号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2018年1月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



明けましておめでとうございます。寒波の被害が多発していますが、みなさまお元気ですか？

ねがいのいえは昨年、開設以来最大の危機を迎えましたが、スタッフのチームワークによって見事に乗り越え、今はこれまでに以上に安心の体制を築くことができました。不足していた人員もじょじょに持ち直して、縮小営業していたショートステイや教室活動もほぼ元に戻りました。

そして、多くのみなさまからご支援を受けながら、進捗状況を報告できないまま滞っていたグループホームの新設計画が遂に動き出しました。この一年はこれからのかじ取りに重要な年になります。現在の状況と今後の計画を報告いたします。

### これからの5ヶ年計画

ねがいのいえ本部からほど近い場所で200坪の土地を購入し、グループホームとショートステイを新築する計画に、多くのみなさまからご支援をいただきながら、さいたま市の開発が進まず2年が経過していましたが、ようやく協議が動き始めました。滞りなく進めば、夏には着工、年末には完成の予定です。

生活に困難を抱え日々不安を感じているご家庭を長い間お待たせしてきたことを大変心苦しく思っております。そして、その一軒が完成し緊急で支援の必要なかたが入居しても、次に倒れる寸前のご家庭がすでに現れています。今回の新築の手続きがすべて整ったら、すぐに次の土地を購入し、3年以内にあと2棟を建てる計画に着手します。また、すでに運営しているグループホームとねがいのいえ本部も組み換えを行い、5年以内に合計33人分のホームを確保するというのが、これからの5ヶ年計画です。

また、事業拡大に伴い懸念される人材確保の問題についても、内閣府の補助金を獲得し春から企業内保育所を開設することが決まりましたので、大きな一助となることと思います。お子さんを預けて働きたいというお知り合いがいらっしゃいましたら、お誘いいただけると幸いです。

一方で昨年は、残念ながら事業縮小となった部門もありました。就労移行支援として8年間続けてきた高齢者向け宅配弁当「ニコニコキッチン」の業務は、スタッフの負担が大きくなり12月末をもって撤退しました。福祉団体が一般企業と競合しなければならない就労分野の難しさを痛感しましたが、今後新たな作業を開拓して、就労支援の充実に努めたいと思います。

### 今注目の「ごちゃませ」の福祉

ホームの新設が進まない中で資金を軽々に動かすことも出来ず、現状維持のまま事業停滞の感もあったねがいのいえでしたが、その間も障害福祉を巡る世の中の動きは目ざましく、素晴らしい実践を展開する団体の活躍は、全国津々浦々で花を開かせています。

ことに最近、マスコミにも頻りに登場する最注目団体が、石川県の社会福祉法人佛子園です。戦災孤児の支援から始まったという歴史ある団体ですが、「ごちゃませ」の福祉という理念を標榜し、障害のある人も高齢者も関係なく、誰もが交流し合う街づくりのモデルとして設立した「シェア金沢」は、1万坪の敷地の中に、街の人が集う温泉センター、キッチンスタジオ、フットサルコート、学童保育、そしてアルパカ牧場まであり、その街の中に子どもたちの歓声が弾け飛び、市民の笑顔が咲き誇っています。加えて、高齢者と学生の住宅あり、障害児の暮らすホームがあり、温泉センターとアルパカ牧場は就労支援、生活介護として運営され、障害のある人たちがレストランや清掃や飼育の仕事を行っています。

就労分野では、福祉団体として全国で唯一、JRの駅舎の管理を委託されているのをはじめ、お洒落なカフェはもちろん、地ビール生産まで手掛けるという、高い先駆性を誇っています。温泉を運営するという特に驚きの実践は、佛子園ではすでに3軒目となります。

初めて手がけた温泉施設は、後継者不在で廃寺の危機に瀕したお寺の再生を委託されて、街の人が集まれる銭湯に改修した「西園寺」が始まりでした。歴史ある古ぼけた建材の味わいをそのまま残しながら、しかし洒落た造りのカフェを併設し、街のコミュニティの場として、そして障害のある人の働く場所として機能しています。

その西園寺で、障害のある青年と認知症の老人が出会いました。生きる希望を失い引きこもっていた老人が、2年間リハビリをしても改善しない青年を励まし、自分がいなければ彼が死んでしまうと言って毎日通いました。青年もまた、意欲を取り戻し3ヶ月で改善を見せたそうです。一体「一石何丁」なのか、介護の専門家ができないことも可能にする「ごちゃませ」がもたらすその成果は、は多くの人に希望を見せてくれます。



住民の一体感を感じさせるその街づくりは、間違いなく今の日本社会の最先端モデルです。国も手厚い補助金で推進し、3年以内に100以上の市町村が同様の取り組みを実現することが決まっているということに感激を表していた雄谷理事長は、これほどの偉業を達成した偉人なのに、お近づきになりたいと思わせる気さくに満ち、スタッフのみなさんで披露したミュージカルダンスにも自ら舞台に立って踊られる姿は、一番の感動でした。そして先駆者の実践は、新しいチャレンジを試みたいと思う情熱を自分の心にも灯してくれました。

### 大切な家族との別れ

中学2年生のあつしくんは、言葉の話せない重度な知的障害があり、パニックを起こすことも少

なくない自閉症の男の子。今年初めての利用の日に、お母さんから「おじいちゃんが末期のガンなんです…」とうかがったが、なんとその2日後に亡くなられた。あつしくんにとっても良き理解者だったおじいちゃん。その姿が見えなくなり、あつしくんも淋しさを感じていたことだろう。

亡くなられて2日が経った日、どことなく落ち着きのなさが漂うあつしくんの気持ちに寄り添いたいと思い、個別の時間を設けた。

体のやりとりとタッチセラピーから行い、始めのうちはゆったりできていたものの、ツバ吐きが現れ徐々にテンションが上がってきてしまった。気持ちを表すのはいいが、あまりいい雰囲気ではなかったため、言葉での誘導に切り替えることにした。いくつか声かけをすると、あつしくん自身の気持ちが立ち、自らペンを握って筆談を行うことができた。

「おうちの人たちはどう？」と尋ねると、

「いまみんないっしょうけんめい かなしみをこらえようとしている

ぼくだっておじいちゃんにありがとうのことばをいいたかったのにいえなかった」

と綴った。

その後も続けようとしたが、紙をわしづかみにしたり寝転がったりしてしまう。

「まだ受け入れられないよね。」と背中に手を当てながら気持ちを汲み取り、「おじいちゃんにお手紙を書こう」と伝えると再び紙に向き合うことができた。

「おじいちゃんのこと… おじいちゃんありがとう ぼくがんばります」

書き終えたあとは、スタッフに寄り添われゆっくりと過ごすことが出来た。

後日、書いた手紙をお母さんに渡そうとあつしくんに提案し許可をもらい、お母さんに渡すことができた。

数日後の火葬の日。あつしくんは火葬には立ち会わず、いつも通り登校し放課後デイも利用した。

しかしあつしくんには、おじいちゃんと最後のお別れの日だとわかっていたようだった。学校で泣くことが多かったと先生から引き継ぎ、デイの活動が始まる時にも気持ちが出そうになるのを堪えていた。そして活動がおわり、家に帰る前に一気に気持ちが溢れた。その泣き方はとても激しく辛そうなものだったので、急きょ個別の時間をもつことにした。



しばらく泣き続けたあと、スタッフに包まれるような形でゆっくり過ごせたあつしくん。すでに落ち着いているようにも見えたが、「今の状態で帰るとお母さんが心配しちゃうから、少しでも落ち着いて帰れるようにゆっくりしてから帰ろう」と伝えた。

その時、さほど体に力が入っていなかったのを見て筆談を始めると、

「めのまえがらくて どうしたらいいのかわらない おしえて」

と綴った。続けて「おか おか」と2回書いたがそれ以上は書こうとしなかった。おそらく「おかあさん」と書きたかったのだろう。

本来ならすでに帰宅している時間でもあったためか、何度も時計を見ては時間を気にするあつし

くん。早く家に帰りたいと訴える素振りも見せたため、

「お母さんやおばあちゃんのそばにいたい？はいかいいえで答えてみて？」と伝えると、

「そばにいてあげたい」

としっかり綴った。口頭で再度「大丈夫？」と聞くと大きくなづいたためそこで終了とした。

靴を履く際に少しためらいも見受けられたが、その表情は清々しいものだった。家に帰るまでの車内では泣くことなく、いつものようにおしゃべりをするように声を出していた。振り返れば筆談をしているときにも、おしゃべりをするかのような声が出ていた。

家に送った際、あつしくんがおじいちゃんに会ったのは年末が最後だったとのこと、先日書いたおじいちゃん宛ての手紙は棺に入れたとのことをお母さんが話してくださった。

「ありがどうのことばをいいたかったのにいえなかった」

あつしくんの中で、おじいちゃんをはじめ我々にもっとも言いたかったのはこの言葉なのではないかと感じた。

それから3週間が経ち、お母さんとお話する機会があった。今までわが子がそんなに理解しているとは思っていなかったが、ここ数日、あつしくんが目を抑えながら悲しげに泣いている姿や、お骨の前に自分で座布団を持って来て座る姿、教えてもいないのに仏壇の鈴を鳴らしている姿を見て、本当にいろいろなことを理解していることがわかった。そして筆談についても、報告を聞いた時は信じられなかったが、今は家族のことをあれほど思ってくれていることがわかり、あつしくんに対する見方が変わった、ということも話してくださった。

以前よりもむしろ深い落ち着きを身につけたあつしくんの、気持ちを表現するお手伝いができたように思えた。大切な家族を亡くした悲しみと淋しさを乗り越えるのにどのくらいの時間を要するかわからないが、またひとつ成長したあつしくんを私たちスタッフは、これからも支えていこうと誓った。

ねがいのいえスタッフ 大島 彩華

意思決定支援という分野が障害福祉界を席卷中だが、どれだけ心の奥深くまでアプローチ出来るだろうか。数日の関わりの中でこれほどまで、その心のひだに寄り添う支援をしたスタッフに感動するばかりである。そして多くの現場職員が、心の支えをシェアする仲間になって欲しいと願ってやまない。

## 理事長の著書「行動障害が穏やかになる心のケア」 好評発売中

1年前に出版した、理事長藤本真二の著書を読まれたかたから多くの感想を寄せていただきました。

アマゾンでも買えますが、メールまたはファックスでこちらへお申込みいただくと著者割引になります。今回も申込チラシを添付いたしますので、多くの方に読んでいただけたら幸いです。

